

優秀賞

「イン・ザ・プール」 奥田英朗(文芸春秋)

フードビジネス学科 加藤良空

皆さんに読んで判断していただきたい。この本の主人公である伊良部と言う精神科医がヤブ医者かどうなのかを、私はヤブ医者だと思うが、それと同時に診察してもらいたいと思ってしまう。

この物語は伊良部総合病院・神経科の伊良部一郎が少し変わった病の患者を常識では考えられない方法で治してしまう。治すと言う表現は正しくないようにも思えるが、病を忘れさせて無かったことのようにしてしまうのだ。ここまでであれば決してヤブ医者には思えないかもしれないが要素はたくさんある。浪費癖があり毎回診察では無意味な注射をしたがり、患者のプライベートに首を突っ込み引っかき回したかと思えば極度のマザコンでそのくせまったく自己反省をしない自己肯定力の塊なのだ。もはや医師としてではなく人としても疑ってしまうほどで病を持っていない元気な人なら絶対に近づきにくい人物だ。読んだ私だけでなく話に出てくる病院の先生方も伊良部のことは避けているし診察室も地下に追いやられている。

最後の最後まで患者は完治していないし伊良部が直接的に特殊な治療をするわけではない。本当に不思議な医師だが患者にとって伊良部は毎日でも通う価値のある医師なのだ。人としてはどうかと思うが生き方は尊敬できてしまう。きっと物事を深く考えこんでいなくて後先のこと考えるより今自分が何をしたいのかを理解し優先している。だから治ってしまうものなのかもしれない。自分ができない生活をし自分がこれほど悩んでいるのにコイツは、と最初はあきれていても関係を持つにつれて不安や悩みについて考えすぎなのは自分なんじゃないかと気づかせてくれているのかもしれない。

今現在、不安なことや悩みがある人、考え込んでしまう人、気持ちがしんどい時にぜひ読んでもらいたい作品。治るわけではないが気持ちは絶対楽になるだろう。おおかたマトモで真面目な日本人の処方箋となりうる本だと思う。